

影響関係あるいはその基盤となる中世史の資料の発掘状況と研究のゆきづまり突破や進展の意味で理解されうる。それは一面中世哲学の歴史的理解にとって多大の寄与をなすであろうし、断絶されていた資料や歴史交流の闇を照らし出す意味をもつ。その意味でやはりそこでは連続的側面が積極的に理解されるであろう。さて哲学的知の場合そうした理解ですまされるのであろうか。

哲学が自然科学的な進歩や資料の発見をも含めた文化的交流史に還元できないとすれば、その根本的特徴はどこに求められるのだろうか。それは歴史と自然をまたぐわれわれの生の根拠^{アルケー}に対する問いの質と深さに、ではなかろうか。

その意味ではギリシア哲学とヘブライ思潮がはじめて出くわして新たに根拠をめぐる問いが苛烈に問われたギリシア・ラテン教父時代はまさに知の断絶と連続、カオス化とロゴス化の時であり、人間の生の一切がそこにかけられた問いの時代であったことは容易に窺えるといえよう。すなわち、その時代には、神のアルケー（三一論、神人論、神秘）、人間のアルケー（自由意志、歴史など）をめぐる根本的問いが深められたのであった。しかしカロリング朝に至る、古代末期からの知の探究にあっては、どのような問いが提起され、それが人間の生と理性をどれほどまでに絶望にまき込んでしかもやがて新たな知の地平を披いたのか、が非常に見えにくいのである。

今回の野町、清水両先生の御発題が未だ開拓されていない時代に関わる前代末聞の探究と解明であり、非常に教えられること多としたが、質問者には他方で依然この断絶と連続の地殻変動をひきおこした知の問いとは何であったのか、が問いとして残っている。

意見

ラテン文化圏における東方的知

秋山 学

討議の終了間際に意外にも発言を求められ、拙見を述べる機会が巡ってきた、その際に強調したことは、古代末期までの地中海世界における「知」が、ある意味で「ギリシア語に則した十全な知識」を意味するものであり、哲学的レベルであれ教義神学のレベルであれ、このギリシア的知の普遍的浸透性の有無が「古代末期」と「カロリング期」とを明確に区別する指標になるのではないか、という点である。

まずカッシオドルスは、たとえばアレキサンドリアのクレメンスの著作『ヒュポテュポーセイス』のうち「共同書簡」に関する部分の訳文を遺しており、それは *Adumbrationes* の名で伝承されている。彼が554年に建てた Vivarium 修道院では、当然ギリシア教父神学やギリシア語聖書原典の研究をはじめとする東方知の摂取が、その教育プログラムに組み込まれていた（『綱要』序を参照）。またプラトンとアリストテレスの全テキストに訳注を施し、ラテン語圏に伝えようと企図したボエティウスの場合、彼がギリシア知に対して抱いていた意味づけの大きさは明らかであろう。このように古代末期にあつては、東西地中海の文化が依然として相互交流を保ち、地中海世界が一体化していたと言えるであろう。一方カロリング期においては、それら東方的知が、エリウゲナなどごく一部の有識者の場合を除き、既に普遍的な浸透性を失っている点が顕著である。この点は、パネラーお二人の提題でも言及されていた『カロリング文書』（*Libri Carolini*）において甚だしい。この『文書』は、公会議の原ギリシア語テキストに対して誤解に満ちたラテン語訳テキストが流布したことや、政治的な様々な思惑が絡んだことなども関係して、聖画像破壊・擁護をめぐる激動した東方世界の神学の展開を、超然と座視しようというカール大帝の意図が反映されたものとなっている。それは「意図的曲解」とでも呼ぶしかないような体のものである。確かに清水氏が強調するように、論理学などの領域で「事柄」として古代の知が継承・展開されたのは事実である。しかしそれは完全に「ラテン語」による摂受であり、もはやギリシア語を参照しつつ理解されるものではなかった。もちろん、西方世界でも後に『文書』の方向性は修正されることになるが、イコン芸術が発達しなかったことや、聖霊の発出をめぐる西方的理解の展開、そしてローマ教権の絶対視など、いわゆる西欧的理念を画した点は、良かれ悪しかれそれ以降の歴史の動きを決定づけてしまうことになり、文化・神学・政治などあらゆる側面において、西欧世界を東方世界から独立した領域として確立するのを加速させたと言える。

以上のような史実を踏まえるならば、エリウゲナが東方的知を培いえた理由も含めて、ギリシア知のみならずヘブル語の伝承者ともなったと言われるアイルランド系修道院の展開等に関し、本シンポジウムで特化した報告が行われることが望ましかったかも知れない。そこで浮かび上がって来るのは、まず南イタリアやシチリア島に点在していたギリシア系修道院の実相であろう。また、アイルランド系修道院が司教・教区制度と修道靈性とを巧みに融合させていたという点は、東方シリア系修道院にお

ける祈禱サイクルが、司教の統括的管轄に添うものであったということを想起させずにはおかない。今後の中世哲学研究が、史的・文献学的な方面のみならず、典礼学や東西交流史の分野などとも連携すべきことに思いを馳せた次第である。